特別寄稿

日本栄養・食糧学会の生い立ち (1947~1992)

島 蘭 順 雄
東京大学名誉教授

Forty-five Years since the Establishment of the Japanese Society of Nutrition and Food Science (1947-1992)

Norio SHIMAZONO

Prof. Emeritus at the University of Tokyo

日本栄養・食糧学会第41回総会が1987(昭和62)年5月に女子栄養大学において開かれた際、創立40周年記念講演会が埼玉県坂戸文化会館を会場として催された。本稿はその席上で行われた記念講演の記録に若干筆を加えたものである。日本栄養・食糧学会は創立50周年記念として会の歴史を編む計画があると聞いているので、本記録を印刷に付することを今日まで差控えてきたが、創立時以来の会員の計報が続々と伝えられるようになったので、一日も早く印刷して会員各位より補正、加筆などを受け、50周年記念の正確詳細な歴史の編纂に役立つようにしたいと考え、ここに公表することとした次第である。

本稿は歴史として記述する関係から、すべて敬称を省き敬語を用いないこととした点につき、読者の了承を乞う次第である。

I. 設立の経緯

日本栄養・食糧学会が設立されたのは、昭和22年すなわち1947年のことであって、1月11日発起人会が開かれ、出席者33名で、学会の設立が議定され会則が決定された。このとき会長を大森憲太(図1)とし、9名の幹事が決定した。その氏名は次に示すとおりで、前年の秋から大森を中心としてこの9名が慶応大学の食養研究所に集まって協議を重ね、この運びとなったものである。

有本邦太郎 原 実 稲垣 長典

川崎近太郎 中川 一郎 大磯 敏雄
島蘭 順雄 櫻井 芳人 田村盈之輔

学会の第1回総会は5月1日、2日の両日慶応大学医学部北里図書館において開催されたが、その席上で大森会長が述べた開会の辞において、本会の設立の目的が次のとおり示されている。

○食糧の充足と栄養の増進が今日焦眉の急であるとともに、文化日本建設の基礎であること、

○栄養の研究と食糧の研究とが連繫し緊密な協力を行い、栄養学の各分野の学者の強力な総合を行うことが必要で、端的にいえば医学と農学との結婚によって最も丈夫な栄養学の子が生まれると思われること、

○学者の集まりとして有機的に連絡を保って栄養学の進歩発達をはかり、わが国現在および将来の栄養食糧施策に重要な科学的基礎と適正な指示を与えようとするものであること。

本会の設立に対してはGHQ(総司令部)の栄養顧問として来日した米国の栄養学者 Paul E. Howe 大佐(図2)の示唆があり、同氏は第1回総会において来賓講演として Broadening the Field of Nutrition for National Health と題する講演を行い、国民の健康増進のため栄養学の拡充発展が必要なことを述べている。Dr. Howe については、戦後の食糧援助や国民栄養調査の実施などわが国の栄養上の施策に対し、その進言が大きく貢献したことが知られている。

日本においてこの学会よりも以前に組織された栄養学を専門とする学会としては、1921(大正10)年内務省栄養研究所内に佐伯 矩らによって「栄養学会」が設けられ

図 1. 大森憲太 (初代会長)

ていた。しかしこれは栄養研究所関係者を主とする組織で、全国的に専門家を糾合する組織として活動するに至らなかった。

また1943(昭和18)年には太平洋戦争の進行で日本およびアジア諸民族の栄養・食糧が危殆に瀕している状況に対し栄養学・食糧学の関係者がその栄養保全のため万全の方策樹立に資するため力を合わせようという趣旨で、柿内三郎を会長として、医学・農学の栄養学に関係の深い人々が「大亜營養学会」を組織したが、この年の3月と12月とに例会を開いただけで、終戦によって学会は消滅したのであった*。

そして終戦の翌々年に至ってここに本学会が設立されることになったのである。ここで制定された会則で学会名は「栄養・食糧学会」**とし、本会の目的は栄養学の進歩を図り国民栄養の向上に寄与することにあるとした。そして会員を正会員(同学者で会費年額 20 円を前

図 2. Paul E. Howe

納する者)と賛助会員(本会の趣旨に賛成し寄付をした者)とし、評議員の推薦により入会する。役員は会長1名、顧問および評議員若干名、幹事若干名で、役員は毎年総会において会員中より互選し任期1年とすることと定めた。そして事務所は当分厚生省公衆衛生院に置くこととした。

この会則は学会第1日の午後、評議員会、学会総会において承認せられ、これに基づいて初年度会長に大森憲太、評議員に発起人全員(81名)を決定し、幹事(9名)は全員留任とし、地方幹事8名を加えた。

この第1回総会の出席者は約500名で、特別講演4題、会員講演41題があった。特別講演の演者と演題は次のとおりであった。

田所哲太郎：米飽食の習慣と主食代替の研究
尾崎 準一：食糧加工の現在と将来
坂口 康蔵：栄養と疾病について
川崎近太郎：ビタミン研究の進歩

Ⅱ. 第1期 20年の歩み(1947~1967)

1. 運営と役員

1947(昭和22)年5月に第1回総会を開いて発足した栄養・食糧学会は、会則に従って会長、評議員、幹事が定められ、東京の幹事が主となって運営に当たった。会長は初代の大森憲太から1948~1949(昭和23, 24)年度は井上 硬(図3)に引き継がれ、会長が学会代表者として総会をも主宰した。しかし1950(昭和25)年度尾崎準一会長(図4)のときから総会主宰のためには別に会頭を置くこととなり、第4~8回総会の会頭はそれぞれ茶珍俊夫、柳金太郎、高田亮平、児玉桂三、清水多栄に委嘱され、その後もこの形が続けられた。1955(昭和30)年度からの会長は児玉桂三(図5)で4年間在任した。評議員は年

* 大亜營養学会の記録については、島菌順雄：日本の栄養学発展のひとこま、日本臨床栄養学会雑誌、8(2)、13~21(1987)参照。

** 英語名：Japanese Society of Food and Nutrition, 1983年より Japanese Society of Nutrition and Food Science と改称。

図 3. 井上 硬 (第2代会長)

図 4. 尾崎準一 (第3代会長)
(木村広子氏蔵)

度の経過とともに増員された。幹事は1950(昭和25)年度に神立 誠, 小池五郎が加わり, 地方幹事の増員も行われた。こうして東京の幹事が主になって学会を運営する形態が1967(昭和42)年度まで続くのである。幹事は庶務・会計・編集を分担した。なお, 会長の経験のある者等に顧問を委嘱するのが例となった。

1961(昭和36)年4月, 第15回総会において会の名称が「日本栄養・食糧学会」と改められ, 会則の改正が行われた。まず役員の任期は2年で再選を妨げないものとし, ただ会頭は任期1年で重選されない原則とした。次に本会の支部を結成することができるものとした。また学会賞を設定し, 授賞内規を定めた。

このようにして, 本会は創立以来, 1967(昭和42)年に至るまで20年間にわたり主として東京の幹事によって運営され(図6), 発展を続けた。そして1967年の第21回総会において全国的な理事会の組織が発足することになるのである。創立以来1967年までの会長と会頭の氏名を表1に, 顧問と幹事の名簿を表2に示す。

事務局は前述のとおり創立時には厚生省公衆衛生院に置かれたが, 1950(昭和25)年夏, 東京大学農学部尾崎研究室に移転し, 1954(昭和29)年東京大学医学部栄養学教室に移ったのち, 1956(昭和31)年から東京大学農学部農

芸化学教室に定着した。

2. 研究発表会の開催

本学会は年1回, 総会として研究発表会を国内各地で会頭(第3回までは会長)主宰のもとに開催した。時期は4~5月が多く, 稀に6月, 北海道で開催のときは8~9月であった。第6, 12, 28回のごとく日本ビタミン学会と同時同所で開催されたこともあった。

初期には一般演題のほかに栄養学方面, 食糧学方面の特別講演が行われたが, 第9回総会(1955)からシンポジウムも催されるようになった。一般演題の数は年とともに増加した。また学会賞が制定されてからは受賞講演も行われるようになった。

1950(昭和25)年度から日本医学会第14分科会に本学会が当たることとなり, 従来栄養研究所の栄養学会が担当していたのを, 交代した。そして1951(昭和26), 1955(昭和30), 1963(昭和38)各年の日本医学会総会に際しては第14分科会の集會を, 本学会の第5, 9, 17回総会として開催した。1959(昭和34)年には別に開かれた第14分科会に本会として参加しシンポジウム「アジア地域における栄養問題」を開催した。

本会の創立20周年記念大会は1966(昭和41)年5月, 第20回総会の第2日に東京の九段会館ホールで開かれ,

図 5. 児玉桂三（第 4 代会長）

島園会長の挨拶に続いて次の 3 氏の特別講演と映画「饑餓との戦い」の上映があった。参加者は千数百名に達し、そののちの記念祝宴の懇親会も盛会であった。

尾崎 準一：本会創立時の回顧

尾崎忠二郎：統計からみた世界の食糧事情と見通し

鈴木 尚：日本人形質の時代的推移

1947(昭和22)年以降1967(昭和42)年に至る総会の開催記録と、会頭、会長の氏名を表 1 の前半に示した。また、第 15 回総会の際の集合写真を図 7 に示した。

本会設立以来、総会以外に初期には通俗講演会や講習会を開き啓蒙的に活動し、地方で講演会を催したこともあった。1949(昭和24)年からは東京で研究発表会が開かれ、回を重ねて1956(昭和31)年には第 23 回となった。この会はその翌年から栄養・食糧学会例会として開かれ、1965(昭和40)年支部設立とともに関東支部例会（大会）となった。

地方で早くから活動を開始したのは北海道と九州の会で、前者は1964(昭和39)年には第 14 回、後者は1965(昭和40)年西日本大会と改称したが、1967(昭和42)年には第 21 回の会となっている。

3. 会誌の発行

本学会の学会誌としては1947(昭和22)年12月1日、

図 6. 役員会のあと

(1959(昭和34)年9月、香川栄養学園にて)

後列左より：稲垣長典，神立 誠，島園順雄，櫻井芳人，田村益之輔，小池五郎。

前列左より：有本邦太郎，佐々木林治郎，大森憲太，香川 綾，原 実，中川一郎。

図 7. 第 15 回総会集合写真 (1961 年 4 月, 徳島)

最前列左端より：小池五郎，阿部達夫，松村義寛，島蘭順雄，田中静雄，堀田一雄，黒田嘉一郎（会頭），有本邦太郎（会長），兒玉桂三，安田守雄，
利金太郎，原 実。
島蘭の右後より：中川一郎，○，茶珍俊夫，稲垣長典，（右後）田村盈之輔，森高次郎，（右後）鈴木慎次郎，藤田秋治，（右後）速水 決，廣畑龍造，
松尾 登，大磯敏雄，（右後）福井忠孝，満田久輝。

「栄養・食糧学会誌」* が発刊され、第1巻第1号は第1回総会特輯号として総会の記録や発表論文の抄録、本会創立の経過や会則を掲載している。第2巻からは誌名を「栄養と食糧」* と改め、1949(昭和24)年4月には第2巻第1号を発行し、以後1年に4~6号を発行して1巻とした。内容は綜説と報文(原著論文)に、総会や研究発表会の抄録、会報、資料などが掲載されている。記事(抄録)として本会のもののほか、脂溶性ビタミン研究委員会(初期)、国民栄養研究協議会(1964年まで)、必須アミノ酸研究委員会(1969年まで)の研究報告抄録が掲載されている。

本学会誌の発行所は第1巻は民生科学協会出版部で、当時の貧窮な状況の中で発刊を実現された寄与は大きい。第2巻からは第一出版株式会社が発行所(1956年以後は取扱所)となった。当時の困難な状況は会誌の紙質に如実に示されている。1956(昭和31)年からは東京大学農学部農芸化学教室が発行所となった。表紙の変遷を図8~10に示す。

会誌の編集は編集幹事により行われたが、初期の川崎近太郎以後、櫻井芳人が中心となって力を尽した(表2)。

4. 学会賞の設定

本会の学会賞が設定されたのは1961(昭和36)年のことで、渡辺 厚評議員を通じて武田薬品工業株式会社から寄付の申し入れがあった機会に、「日本栄養・食糧学会賞」、副賞「武田賞」として設定され、翌年には佐伯芳子の申し出を受けて「佐伯賞」が加えられ、後者は功労賞の意味を持つものとなった。

授賞内規では、評議員の推薦した候補者(本会会員に限る)につき幹事会が選考委員会となって審査し、その結果を会長に報告する。会長はこれを全評議員の投票にかけ2/3以上の賛成票を得たものを受賞者とするものとした。

こうして毎年受賞者として功労賞(佐伯賞)1名、学会賞(副賞 武田賞)2名が発表され、総会席上で贈与式、ついで受賞講演が行われるのを例とした。表3の中に受賞者氏名と授賞理由を示してある。

図11に学会賞賞牌のデザインを示す。学会誌の表紙左下のマークはこれをとったものである。

5. 組織と経理

本会は正会員・賛助会員をもって組織し、正会員の会費は1947(昭和22)年の創立時には年額20円であったが、2年後には400円となり、その後2~4年ごとに値上げ

* 英語名: Journal of Japanese Society of Food and Nutrition, のちに Journal of Japanese Society of Nutrition and Food Science に変更される。

図8. 会誌創刊号(1947) (B5判)

図9. 会誌第2巻第1号(1949)

図 10. 会誌第10巻第1号 (1957)

が行われて1967(昭和42)年には年額1,200円となっている。その間在籍正会員数は増加を続け2,000人となった。そして賛助会員からの寄附金を加えて、会計規模(収入総額)は400万円弱となった。

会則で支部を置くことができることになり、1967(昭和42)年の総会において全国を分けて、北海道、東北、関東、中部、近畿、中・四国、西日本の7支部が置かれることになった。

表4前半に1947(昭和22)年度～1967(昭和42)年度の本会在籍正会員数と会費年額、会計規模の推移を示す。会計については永く会計幹事を勤めた原 実の功を逸することはできない。

Ⅲ. 第2期 25年の歩み (1967～1992)

1. 会則の改正

本学会は創立以来、東京の幹事によって運営され育てられてきたが、20年の歳月を経てここに時期が到来し、理事制のもとに全国的な運営組織に移行することになり、1968(昭和43)年、島藺会長のもとで第22回総会に際し会則の改正が行われた。すなわち、会長のもとに理事若干名を置いて会務に当たることとし、理事は評議員中より地域性その他を考慮し評議員会の議を経て会長が委嘱するものとした。評議員は理事会の議を経、総会の承認を得て会長が委嘱することとした。幹事は理事を補

図 11. 学会賞(武田賞)の賞牌

佐するもので、理事会の議を経て会長が委嘱するものとした。また、会長の経験を有する者に顧問を委嘱することとした。

この会則改正の前年に監事2名を置くことが総会で決定されている。これは正会員中から総会の議を経て会長が委嘱する。また会長、会頭は評議員会で互選し、総会の議を経て決定する。役員は任期2年、重任を妨げない、ただし会頭は1カ年とした。

次に、本学会に名誉会員を設けることとした。さらに1979(昭和54)年の総会で、終身会員を設けた。ともに理事会の推薦により評議員会の議を経て総会の承認により決定するものとした。

会員の種別としては、そのほか1973(昭和48)年度から団体会員が設けられ、また正会員のうち学生会員の会費が別に示されることになった。

事務所は、1956(昭和31)年以来東京大学農学部農芸化学教室におかれていたのを、1970(昭和45)年夏、東洋文庫(東京都文京区本駒込)に移転し、さらに1972(昭和47)年夏から日本学会事務センター(東京都文京区弥生2)に事務を委託することになった。

学会の将来の運営については、将来計画委員会が1979～1981(昭和54～56)年度に組織され検討が行われた。学会の社団法人化については、1983(昭和58)年度の総会でその準備推進の計画が認められ、そのうち小委員会を設けて検討がすすめられている。

2. 会 員

本学会は会員として正会員、団体会員、賛助会員、名誉会員、終身会員により構成される。正会員は本会の目的達成に参画しようとする個人で会費を納める者とし、入会に際し審査を受ける必要はない。会費は会則によって定められているが、1973(昭和48)年度から学生会員については会費が軽減されることになった。賛助会員は本会の発展を援助する目的で所定の会費を納めるものとし、団体会員はそのような援助目的なしに会費を納める団体で、会費は正会員よりも高くなっている。1967～1992

(昭和42～平成4)年の間の在籍会員数、会費を表4後半に示した。正会員の会費は1967(昭和42)年に1年1,200円であったものが1986(昭和61)年には6,300円となっている。

名誉会員は、本会の発展に尽くし、学術上顕著な功績のあったものとして推挙されるもので、**終身会員**は多年にわたり本会の発展に寄与した学術上業績のある人で、ともに会費の納入を免除される。その選出の内規では、はじめ年齢がおおむね75歳以上とされていたが、1982(昭和57)年からおおむね73歳以上とすることに改定された。

名誉会員および終身会員について、推薦開始以来の記録を表5に示す。

全国に7支部(北海道、東北、関東、中部、近畿、中・四国、西日本)が置かれ、会員はこのいずれかの支部に属することとなっている。表7に各支部への会員の分布を示した。関東支部40%、近畿支部20%、中部および中・四国支部それぞれ10%の分布率となっている。本部からの支部経費の補助はこの比率を勘案して算定される。

3. 役員と経理

本会の運営は、1968(昭和43)年に理事の制度が制定されて以来、会長、会頭、理事、幹事、評議員、顧問、監事の役員によって行われてきた。

1992(平成4)年までのあいだの理事、監事、顧問の名簿を表8に示す。会長、会頭の氏名は表1に示してある。

役員の選出については、1973(昭和48)年度に役員選出規定検討委員会が検討された結果、評議員、理事、会長の選出方法の案が答申され第28回総会で報告されたのち、1974(昭和49)年度から実施されることとなった。理事は、

【役職(業務担当)理事】:

庶務(1978年度2名、1980年度より3名)、会計(2名)、編集(2名)

【支部選出理事】:

北海道(1名)、東北(1名)、関東(3名)、中部(1名)、近畿(2名)、中・四国(1名)、西日本(1名)

以上17名で構成されることになった。各支部にはそれぞれ支部長がおかれた。

本会の経理は会計理事により管理され、毎年監事の監査をうけた決算と予算がそれぞれ総会において報告、提案され承認をうけている。年度は毎年4月1日に始まり翌年3月31日に終わる。1967(昭和42)年度から1991(平成3)年度に至る毎年度の会計規模(収入総額)は表4に示してある。1967年度391万円であったものが、1991年

には4,534万円に膨張している。

4. 総会・研究会の開催

本学会の総会として1968(昭和43)年～1992(平成4)年に第22～46回の会が開かれたが、その記録は表1に示すとおりである。出席者は初めころから1,000名を超すことが多く、1981(昭和56)年の第35回ころから1,200～1,500名で、第38回では1,700名と記録されている。

総会は会頭によって主宰され、講演、シンポジウム、ミニシンポジウム、討論会、ワークショップ、ポスターセッションなどのプログラムと、会務の報告や協議、授賞式などが執り行われ、一たを会員の懇親会に当てるのが例となっている。

各支部はそれぞれ総会や大会、例会、講演会などをその地域で催している。支部設置以来1992(平成4)年3月末までに開かれた支部大会の回数は、北海道21回、東北25回、関東50回、中部29回、近畿30回、中・四国24回、西日本(不詳)であった。

本会創立30周年に際しては1977(昭和52)年5月20日東京の日本都市センターにおいて記念式典が挙行され、吉村壽人・神立 誠:学会30年の回顧と将来の展望が式典で講演されたのち、記念講演会が催され、次の講演があった。

須田 正巳: バイオリズムと栄養

吉川 政己: 老化と栄養

芦田 淳: 栄養学の基準

山田 浩一: 微生物の食糧資源

また、創立40周年に際しては1987(昭和62)年5月22日埼玉県坂戸文化会館において記念講演会が開催され、次の講演があった。

島蘭 順雄: 日本栄養・食糧学会の生い立ち

小泉 明: 医学の面から	} 21世紀へ向けての 栄養学
一番ヶ瀬康子: 生活学の面から	
唯是 康彦: 経済学の面から	

5. 会誌・資料の刊行

本会の学会誌は「栄養と食糧」と題して刊行を続けてきたが、1983(昭和58)年の第36巻から「日本栄養・食糧学会誌」*と改称された。表紙は従来からのデザインの左下に会のマーク(図11)が入るようになったのち、1977(昭和52)年の第30巻からデザインが改められ、年によって色が変わるようになった(図12, 13)。毎年6号発行して1巻とするが、第21巻(1968)は4号、第22～29巻(1969～1976)は9号をもって1巻とした。

* 英語名: Journal of Japanese Society of Nutrition and Food Science のほかに NIPPON EIYŌ SHOKURYŌ GAKKAISHI と標示され(略号: NESGDC)、この名称が Chemical Abstract Service に登録されている。ISSN 0287-3516。

図 12. 会誌第 30 巻第 1 号 (1977)

図 13. 会誌 (改題) 第 36 巻第 1 号 (1983)

JNSVA5 22(1) 1-70 (1976)

Edited by
THE JAPANESE SOCIETY OF FOOD & NUTRITION
AND THE VITAMIN SOCIETY OF JAPAN
Published by
UNIVERSITY OF TOKYO PRESS

図 14. 英文誌第 22 巻第 1 号 (1976) (B5 判)

英文誌としては1973(昭和48)年から日本ビタミン学会との共同編集で「Journal of Nutritional Science and Vitaminology」(JNSV)が発行されることになった(図14)。この雑誌は日本ビタミン学会が1954(昭和29)年以来発行していた Journal of Vitaminology を第19巻から上記の名称に変更して引き継ぐことになったものである。毎年6号発行され1巻となる。

和文誌の内容は総説(総説), 報文, 研究ノート, 論壇, 資料, 学会記事, 学会発表論文抄録などで, 英文誌は原著論文を掲載し, その和文抄録は和文誌に載せられる。

学会誌の編集は従来編集幹事が当たり, 編集実務担当者の補助のもとに行われてきたが, 1968(昭和43)年の理事制度施行後は役職理事として編集理事(2名)が設けられ, そのもとに編集幹事(2名)を置き, 1972(昭和47)年度から編集委員(8~12名)が委嘱せられるようになった。編集委員会は編集委員長, 副委員長を定めて活動する。その氏名は表6に示したとおりである。英文誌の編集に対しては栄養部門, 食糧部門の編集委員が本会から委嘱され, 日本ビタミン学会からの委員と共同し, 委員長, 副委員長がその中から選ばれる。その氏名も表6に示した。

和文誌, 英文誌の投稿規定も定められている。製作事務は1972(昭和47)年以来, 学会誌刊行センターに委嘱さ

れている。

本学会は学会誌のほかに次のとおりの刊行書の出版を行った。

- 1) 栄養・食糧用語集 (1972)
1969(昭和44)年に用語委員会を設け3年にわたる検討の結果を刊行したもの。
- 2) 米・大豆と魚—日本人の主要食品を科学する (1984)
- 3) 栄養生態学 (1985)
- 4) 今日の乳児栄養 (1985)
- 5) 過酸化脂質と栄養 (1986)
- 6) 非栄養素と生体機能 (1987)
- 7) 香辛料成分の食品機能 (1989)
- 8) アルコールと栄養 (1992)
- 9) 成人病と栄養 (1992)

6. 学会賞等の設定と授賞

本学会に学会賞(副賞 武田賞)、功労賞(佐伯賞)が設定された経緯は前に述べたが、1973(昭和48)年から奨励賞(副賞 協和醸酵賞)が設けられ、すぐれた研究を表彰することになった。さらに、1984(昭和59)年度から学会賞副賞に「味の素賞」、奨励賞副賞に「田辺製薬賞」のものが追加された。また1991(平成3)年度から学術奨励金(飯島記念科学振興財団、日本ケロッグ社の寄附による)が設けられた。

これらの受賞者の選考は理事会が選考委員(支部選出理事と評議員代表委員で構成)を組織し、全評議員から推薦された候補者について審査選考していたが、1988(昭和63)年度から各種授賞等選考委員若干名が設置されることになった。委員は会長が委嘱するもので任期2年、引きつづき4年を超えないものとした。授賞記録を表3に示す。

7. 内外学界との連繋

本学会の国内諸学会との連繋については、日本医学会との関係が早く始まり、第14分科会に本学会が当たることとなって評議員、連絡委員、医学用語委員を出し、また総会に対しては分科会長を出してきた。しかし1967(昭和42)年以後は医学会総会の分科会を本学会総会が兼ねることはなかった。

日本ビタミン学会との密接な関係も初期から保たれ、1974(昭和49)年の総会の際の特別講演やシンポジウムは日本ビタミン学会との共催の形で行われた。英文誌が日本ビタミン学会との共同編集のもとに刊行されていることも前述のとおりである。

初期から本学会誌に掲載されていた必須アミノ酸研究委員会の抄録は1973(昭和48)年の第59回の会議の抄録まで続いた。そのほか種々の研究会の予告や記録が会誌の学会記事欄に掲載されている。また諸学・協会からの

共催や協賛の申し入れを受諾することも多い。

本学会は、学会会議との関係として、その会員候補の推薦を行ってきた。第13期(1985年度)の学術研究団体登録では、会員の選出に必要な登録手続きを行い、関連研究連絡委員会を栄養食糧研究連絡委員会(6部)とした。すでに農学研究連絡委員会の中に栄養食糧分科会が設置されていて、本学会はその委員候補を推薦し同委員会と密接な関係を保ってきた。本学会誌に「日本学術会議だより」の毎号が掲載されるようになった。

外国の学会と本学会との連繋としては、外国の専門学者を招いて総会における特別講演や招待講演を依頼し、また、国際シンポジウムや自由討論会を開いて連絡の推進をはかった。

国際栄養科学連合(International Union of Nutritional Science, IUNS)は1948年ロンドンに会議を開いて結成された組織であるが、日本としてこれに加盟を申し入れた結果承認を得、1966(昭和41)年ハンブルグで開催の第7回会議には日本を代表して満田久輝と島蘭順雄が出席し、島蘭がCouncil memberに選ばれ副会長に推された。その後、種々の委員会に日本から委員を出した。IUNSは1968年からICSUに加盟したので、日本の窓口として日本学術会議が分担金を支払うこととなり、国際栄養科学連合の国内委員会が組織された*。

そして国際栄養学会の日本開催を申し入れ、その結果1975(昭和50)年に第10回国際栄養学会の日本開催が受諾され、日本学術会議がこれを主催することが決定した。この段階で本学会がその運営を受け持つこととなり、会長越智勇一(学術会議会長)、組織委員長: 満田久輝、副委員長: 大磯敏雄、事務局長: 金森正雄のもとに8月3日~9日国立京都国際会議場で開催された。シンポジウムに236題、一般演題に646題の発表があり、国の内外から正会員2,400名、同伴者300名の参加があった(図15)。

次に第5回アジア栄養学会を日本で開催の招請が、1983(昭和58)年バンコックで開催の第4回会議において受諾された結果、1987(昭和62)年に本学会が主体となり、井上五郎を会長、細谷憲政、金森正雄、鈴江緑衣郎、田中武彦(事務局長)を副会長として大阪ロイヤルNCB会館において10月26日~29日に開催され、特別講演2題、シンポジウム106題、一般演題280題の発表があった。会議の出席者は、559名、同伴者36名で、そのうち外国人はそれぞれ137名、9名であった。

また、国際食品科学工業連盟(International Union of Food Science and Technology, IUFOST)に対し

* 国際栄養科学連合(IUNS)の設立経過および日本との関係については栄養と食糧、22(2)、52~53(1969)参照。

図 15. 第 10 回国際栄養学会議 (1975 年 8 月, 国立京都国際会議場)

ては、本学会が毎年分担金を納入して今日に至っている*。1978(昭和53)年9月には京都においてその第5回国際会議が開かれた。日本国際食品科学工業連盟(JIU-FoST)に対して本会は理事2名を推薦している。

Ⅳ. 研究の動向

本会創立の1947(昭和22)年という、戦争時代の食糧窮迫の影響が強く残っていて、主食となる米は不足し、巷には栄養失調症が多発していた。その状況を受けて第1回の総会で北海道大学の田所哲太郎が米飽食の習慣を脱却するよう主食代替について特別講演を行ったことはさきに述べたとおりである。大森憲太も会誌第1巻第3号において日本の作物生産の大規模な模様がえを行って、米の飽食を改め、粉食を加えタンパク質・脂肪摂取量の増加をはかるべきことを説いている。

また第1回総会の特別講演の中で、東京大学の坂口康蔵が「栄養と疾病について」と題して話した内容は、主として栄養失調症の問題であった。京都大学の井上 硬が1947(昭和22)年4月、日本内科学会、日本消化器病学会の宿題「日本人の栄養」について述べたところも栄養失調症についての研究報告であった。当時大森や井上が著わした栄養失調症の著書もある。そのような食糧窮迫

の時代から45年間における日本の食料需給の変遷は農林水産省の食料需給表や厚生省の国民栄養調査成績に基づいて知ることができる。この45年間に栄養学の研究はどのような道をたどってきたであろうか。

本会発会の当初には、戦時に引きつづいて国民の栄養基準が研究者の深い関心事であり、一方食糧資源の利用の増進が重要な研究課題となった。タンパク質・アミノ酸関係では、タンパク質の新資源として食用酵母やクロレラが着目されて研究対象となった。必須アミノ酸の必要量が注目され、タンパク質の栄養価の問題が引きつづいて研究された。栄養価向上のために穀類に対しトリプトファンやリジンの強化が効果をあげることが証明された。実際問題としてはクロレラ、食用酵母がヒトのタンパク資源として常用されるには至らず、パンのリジン強化も学校給食で採用することに猛反対がおこって実施されなかった。しかし動物飼料のほうではリジンの応用は効果をあげることにいった。

研究室ではアミノ酸の同定のためにペーパークロマトグラフィーを用いるようになったのも戦後のことで、やがてStein-Mooreのカラムクロマトグラフィーが研究室で使われるようになった。タンパク質の分離測定のためTiseliusの文献に従って電気泳動法が行われるようになったのも、1947(昭和22)年以後のことであった。1965(昭和40)年ころからアミノ酸の自動分析装置が普及してきた。アイソトープが代謝研究に行われるようになった

* 国際食品科学工業連盟(IUFoST)に対しては、本学会のほか日本食品工業学会、日本食品衛生学会が分担金を納入している。

のも欧米に追隨してわが国では戦後のことであった。

脂肪の栄養学的研究では、終戦直後の日本人の1日平均摂取量約15gに満たなかったのが、10年後には20g、20年後には40g、30年後には60gと急速に摂取量が増加し、脂肪の適量が研究の対象となってきた。高度不飽和脂肪酸の栄養学的意義が明らかとなり、脂肪の過酸化物の有害性と、それを防止する方法が研究された。一方、コレステロールと動脈硬化との関係が重要視されるようになり、リポタンパク質の分類でHDL, LDL, VLDLなどが臨床検査にまで採り入れられるようになった。

米の栄養学的研究は長く継続して行われ、ビタミンB₁による強化米は実用に供された。戦前からの胚芽米は今日もその効果を推奨されている。アミノ酸強化の研究については上に述べた。食品衛生の問題であるが、輸入の黄変米が大きな問題となったこともあった。

食糧不足の終戦直後から食糧需給量は増加し、最近10余年前くらいからは栄養量の不足を問題にしくてもよいようになった。ここで栄養摂取量の過剰すなわち肥満の問題がおこってきた。一方、そのような状況の中で1975(昭和50)年ころ脚気患者が発生したことは、栄養学関係者を驚かせた。潜在性欠乏症があらためて注目され、栄養状態判定の重要性、栄養指導、栄養教育の重要性を認識させる事実であった。

本学会創立後2年で1949(昭和24)年に日本ビタミン学会が設立されたので、ビタミン関係の研究業績はそちらで発表されるものも多くなったけれども、栄養関係の研究は本学会で発表されることも多く、たとえばアノイリナーゼ、強化食品、過酸化防止、アミノ酸とビタミンの関係など、本学会で発表された業績も少なくない。

無機物としてカルシウムと鉄は、古くから研究の対象であったが、1975(昭和50)年ころから微量元素が注目されるようになった。後に述べる静脈栄養の発達は、ヒトについて微量元素の必要性の新知見を得るきっかけとなった。

栄養生理の問題として食欲や摂食調節の問題、消化吸収の問題は継続して研究された。そして生態学的研究が注目されるようになった。消化では腸の消化が腸液の酵素でなくて腸粘膜で行われることや、栄養素の活性輸送の機構として受容体タンパクの存在の証明などが行われた。ホルモンの作用機構においても標的器官の受容体について研究が進行した。一方、食物繊維の機能があらためて研究の対象となった。

栄養病理の研究として、食餌療法は古くて新しい栄養学の問題を提供してきた。糖尿病はよく知られているように、第二次大戦中日本における発生が低下していたが、戦後増加した。昔考えられていたように糖質の摂取

量だけが問題でなくて、総エネルギー摂取量が治療上大切なことがわかってきた。また肝臓や腎臓の病気のとき、すべてタンパク質の摂取量を減少させて臓器を庇護するという昔からの考えが覆されて、十分なタンパク補給が治療のために有効に作用することがわかってきた。

最近10余年来の発展はがんと食生活との関係である。変異原性の化合物が微生物を使って探しやすくなり、発がん性物質が証明されやすくなったので、私たちの日常食品の成分中に発がん作用を有する物質が少なからず含まれていることが証明された。日本人に胃がんが多く欧米人に腸がん、肺がん、乳がんが多い事実が食生活と関連づけて考究されるようになった。

先天性代謝異常の研究も、分析法の進歩により進歩し、新生児におけるスクリーニングにも役立った。栄養学の進歩は人工栄養や未熟児栄養に大きな発展をもたらした。

一方、免疫化学の著しい進歩は、栄養学にも大きな影響を与え、病気に対する抵抗力と栄養との関係の研究は今後一層の発展を見るであろう。環境と栄養との関係も大きな研究テーマとなってきた。

臨床栄養における重大な進歩は非経口栄養に見られる。ことに静脈栄養の進歩は、安定な脂肪乳化剤による高エネルギー輸液や、中心静脈法の開発に負うところが多く、術前術後栄養として外科方面の臨床家が効果をあげているが、病態別に輸液成分を考える研究が進行した。輸液のみでなく成分栄養剤(エレメンタルダイエツト)の研究も進歩した。

終戦後数年間は結核もまだ恐ろしい病気であったが、それが克服され、一方乳児死亡も減少し、医学の進歩は平均寿命の延長をもたらした。世界中でもわが国は、平均寿命において最も長寿の国となった。老化と栄養との問題、あるいは老年者の栄養の問題は重要性を増してきた。成人病として日本人に多かった脳卒中が減少傾向を示し、心臓不全が増加してきたのも、食生活の変化が大きく関与すると考えられた。しかし食塩摂取量の低下をはかることは依然として栄養指導の課題となっている。

生物学界で戦後最大の進歩は、分子生物学としてタンパク質の生合成、遺伝機構の解明が進んだことである。今後栄養素の代謝の調節や制御機構の研究がこの方面から進展するであろう。遺伝子工学、バイオテクノロジーとして食品化学に大きな変革をもたらしつつあることは、よく知られているとおりであるが、それが栄養学の重要な問題となってきた。

栄養学の将来については本学会において「将来計画委員会」を設けて検討され、その報告が1980~1981(昭和55~56)年に発表されている。日本の栄養学を代表する学会として、研究の推進をはかるべきことの第一は、基

礎栄養学として独創性の高い研究を推進して栄養学の進歩に貢献することである。第二は国際的な研究活動である。本学会として国際栄養学会議に協賛し、またアジア栄養学会議を主催しているけれども、それらの成果としての国際的な研究活動が今日ではまだあまり効果をあげていない。世界から注目され、また世界に貢献する業績が続々生まれるよう、日本の栄養学者の奮起を切に望む次第である。

追記：はじめに記したとおり、本稿は本学会創立40周年の記念講演に基づき、1947(昭和22)年から1987(昭和62)年までの40年間の記録を前期20年、後期20年としてまとめたものであったが、学会誌に掲載するにあたり、編集委員会の意向により編集事務局において最近5年間の記録を追加し、創立以来45年間(1947～1992)の記録として公表されることになったものである。すでに学会内には50周年記念事業委員会(委員：福岡博保、小池五郎、宮崎基嘉、安本教傳諸氏)が組織され活動を開始している。5年後には記念事業の一環として完全な創立50年史の編纂を期待し、本稿がその土台となれば幸いと存ずる次第である。

表 1. 総会・会長の記録 (1947~1992)

回数	年 月/日	会 場	L:特別講演*5 S:シンポジウム	一 般 演題数	会 頭 (会頭代行)	総会年度 会 長
1	1947 (昭 22) 5/1~2	慶應義塾大学医学部 (東京)	L4	41	——	大森 憲太
2	1948 (昭 23) 5/1~2	京都大学医学部 (京都)	L4	62	——	井上 硬
3	1949 (昭 24) 4/28~29	東京大学医学部 (東京)	L2	72	——	〃
4	1950 (昭 25) 5/1~2	大阪市立生活科学研究所 (大阪)	L4	70	茶珍 俊夫	尾崎 準一
*15	1951 (昭 26) 4/2~3	東京大学農学部 (東京)	L2	88	柳 金太郎	〃
6	1952 (昭 27) 5/7~8	京都大学医学部 (京都)	L2	76	高田 亮平	〃
7	1953 (昭 28) 4/29~30	東京大学医学部 (東京)	L1	83	児玉 桂三	〃
8	1954 (昭 29) 5/20~21	岡山大学医学部 (岡山)	L2	88	清水 多栄	〃
*19	1955 (昭 30) 4/2~4	京都大学工学部 (京都)	S1	99	井上 硬	児玉 桂三
10	1956 (昭 31) 5/2~3	慶應義塾大学医学部 (東京)		84	有本邦太郎	〃
11	1957 (昭 32) 5/5~6	金沢大学医学部 (石川)	S1	98	石崎 有信	〃
12	1958 (昭 33) 5/17~18	東北大学医学部 (宮城)	L1?, S1	108	有山 恒	〃
*113	1959 (昭 34) 4/1, 4/6~7	産経会館, 私学会館 (東京)	L1, S1	100	原 実	佐々木林治郎*2
14	1960 (昭 35) 5/6~7	大阪毎日会館 (大阪)	L2, S2	103	茶珍 俊夫	有本邦太郎
15	1961 (昭 36) 4/29~30	徳島県自治会館 (徳島)	L1, S1	124	黒田嘉一郎	〃
16	1962 (昭 37) 5/12~13	お茶の水女子大学 (東京)	L1, S5	100	櫻井 芳人	〃
*117	1963 (昭 38) 4/3~4	大阪女学院 (大阪)	S2	97	高井 俊夫	〃
18	1964 (昭 39) 5/16~18	相山女子大学 (愛知)	L1, S2	42	古武 彌人	島藺 順雄
19	1965 (昭 40) 5/15~16	宇都宮市栃木会館 (栃木)	L3, S1	107	中村延生蔵	〃
*320	1966 (昭 41) 5/6~8	日本都市センター, 九段会館 (東京)	L3, S2	113	神立 誠	〃
*421	1967 (昭 42) 5/13~14	武庫川学院 (兵庫)	L4, S1	148	館 勇	〃
22	1968 (昭 43) 5/18~19	日本都市センター (東京)	S2	151	中川 一郎	櫻井 芳人
23	1969 (昭 44) 4/19~21	京都市京都会館 (京都)	S2	174	吉村 壽人 (村田希久)	〃

回数	年 月/日	会 場	L: 特別講演*5 S: シンポジウム	一 般 演題数	[名誉会頭] 会 頭	総会年度 会 長
24	1970 (昭 45) 9/2~3	札幌市共済ホール (北海道)	S 2	168	安田 守雄	吉村 壽人
25	1971 (昭 46) 6/7~9	国立教育会館 (東京)	S 2*6	166	大磯 敏雄	〃
26	1972 (昭 47) 4/27~29	徳島県郷土文化会館 (徳島)	S 1	168	白井伊三郎	満田 久輝
27	1973 (昭 48) 5/17~19	国立教育会館 (東京)	S 2	230	小原哲二郎	〃
28	1974 (昭 49) 5/23~25	日本都市センター (東京)	L 1, S 1*7	185	稲垣 長典	〃
29	1975 (昭 50) 5/23~24	京都市京都会館 (京都)		172	藤原 元典	〃
30	1976 (昭 51) 4/23~24	仙台市民会館 (宮城)	L 1, S 1	223	金田 尚志	福井 忠孝
31	1977 (昭 52) 5/20~22	日本都市センター, 女子栄 養大学 (東京)	L 5†	253	藤巻 正生	〃
32	1978 (昭 53) 5/19~21	九州大学, 中村学園大学 (福岡)	S 1	300以上	大村 浩久	芦田 淳
33	1979 (昭 54) 5/1~3	日本都市センター (東京)	S 1*8	290	阿部 達夫	〃
34	1980 (昭 55) 8/4~6	北海道大学教養部 (北海道)	S 6	336	今井 陽	井上 五郎
35	1981 (昭 56) 5/28~30	徳島県郷土文化会館 (徳島)	L 2*9	342	井上 五郎	〃
36	1982 (昭 57) 5/12~14	日本都市センター, 全共連 ビル (東京)	L 1, S 7*10	340	細谷 憲政	藤巻 正生
37	1983 (昭 58) 5/8~10	大阪大学, ロイヤル NCB 会館 (大阪)	L 1, S 5	378	[須田正巳] 田中 武彦	〃
38	1984 (昭 59) 4/29~5/1	京都女子大学 (京都)	L 2, S 3	414	金森 正雄	藤原 元典
39	1985 (昭 60) 4/27~29	お茶の水女子大学 (東京)	L 2, S 4	414	福場 博保	〃
40	1986 (昭 61) 5/2~4	愛知厚生年金会館, 名古屋 大学農学部 (愛知)	L 1, S 1	439	[芦田 淳] 吉田 昭	福場 博保
41	1987 (昭 62) 5/22~24	坂戸文化会館, 女子栄養大 学 (埼玉)	L 2†	*11434	[香川 綾] 小池 五郎	〃
42	1988 (昭 63) 5/2~4	大阪市立大学, 大阪市中央 公会堂 (大阪)	L 1, S 5	394	小石 秀夫	細谷 憲政
43	1989 (平 元) 5/10~12	共立講堂, 池ノ端文化セン ター (東京)	L 3, S 4	383	内藤 博	〃
44	1990 (平 2) 5/8~10	ホテル仙台プラザ, 斎藤報 恩会館, 東北大学 (宮城)	L 2, S 3*8	451	木村 修一	内藤 博

回数	年 月/日	会 場	L:特別講演 S:シンポジウム	一 般 演題数	会 頭	総会年度 会長
45	1991 (平 3) 5/10~12	光華女子短期大学 (京都)	L 3, S 2 ^{*6}	501	安本 教傳	内藤 博
46	1992 (平 4) 5/8~10	川崎医療福祉大学, 岡山ブ ラザホテル (岡山)	L 2, S 2 ^{*6}	511	守田 哲朗	五島 孜郎

*¹ 日本医学会総会に第 14 分科会として参加。*² 佐々木会長は在任中逝去のため残任期間(年度内)は櫻井芳人会長代理。*³ 創立 20 周年記念大会。*⁴ 日本医学会総会の第 14 分科会は別に開かれ, 分科会長古武彌人。*⁵ Lは招待講演を含み, Sはミニシンポジウムを含む。別に受賞講演があったが, この欄には含めない。*⁶ 別に公開討論会, 公開講演会開催。*⁷ LとSは日本ビタミン学会と共催。*⁸ 別に教育講演会, 自由討論会開催。*⁹ 別にワークショップあり。*¹⁰ 別にワークショップと自由討論会あり。*¹¹ ポスターセッションを含む。† 創立 30 周年, 40 周年における記念講演。

表 2. 幹事・顧問名簿 (1947~1967)

【幹 事】(°: 会計, *: 編集, () 内は在任期間)		
有本邦太郎 (1947～)	*稲垣 長典 (1947～67)	大磯 敏雄 (1947～65) *(1966～67)
*°川崎近太郎 (1947～51)	*櫻井 芳人 (1947～67)	*島蘭 順雄 (1947～66)
*田村益之輔 (1947～66)	*中川 一郎 (1947～67)	°原 実 (1947～65)
小池 五郎 (1950～67)	神立 誠 (1950～67)	吉川 春寿 (1955～67)
柳 金太郎 (1962～)	谷 達雄 (1966～67)	*満田 久輝 (1966～67)
*古武 彌人 (1966～67)	〔編集事務委嘱 (1959～67): 福嶋博保, 小池五郎, 久保彰治〕	
【地方 幹 事】		
安田 守雄 (北海道)	小幡彌太郎 (北海道)	有山 恒 (東 北)
近藤 正二 (東 北)	堀田 一雄 (中 部)	茶珍 俊夫 (大 阪)
西尾 雅七 (京 都)	川崎近太郎 (大 阪)	伊藤 登 (大 阪)
岩井 和夫 (京 都)	満田 久輝 (京 都)	和田 正太 (大 阪)
濱本 英治 (中・四国)	川村信一郎 (中・四国)	高井 俊夫 (西日本)
藤本 薫喜 (西日本)	岩田 久敬 (西日本)	
【顧 問】		
井上 硬 (1956～)	大森 憲太 (1956～)	尾崎 準一 (1956～)
戸田 正三 (1956～)	有本邦太郎 (1964～)	児玉 桂三 (1966～)

表 3. 授 賞 記 録 (1961~92)

【 功 勞 賞 】		
年 度	氏 名	授 賞 理 由
1963 (昭 38)	大森 憲太	臨床栄養の研究並びに指導
1964 (39)	児玉 桂三	日本人の栄養所要量の総合的研究
1965 (40)	下田 吉人	栄養を中心とした調理科学の研究とその普及
1966 (41)	尾崎 準一	食糧科学に関する研究
1967 (42)	原 実	病人食に関する研究ならびに指導
1968 (43)	有本邦太郎	国民栄養に関する研究と指導
1969 (44)	島 蘭 順雄	ビタミンおよび必須アミノ酸研究の推進
1970 (45)	香川 綾	栄養学の実践応用に関する研究と普及
1971 (46)	櫻井 芳人	日本食品の研究
1972 (47)	安田 守雄	脂質代謝に関する研究並びに寒地栄養の指導普及
1973 (48)	吉村 壽人	蛋白質栄養の研究とそれを中心とした栄養生理学の進歩への貢献
1974 (49)	廣畑 龍造	米食に関する研究ならびに栄養指導
1975 (50)	岩田 久敬	特殊資源に関する栄養・食糧学的研究と指導
1976 (51)	中川 一郎	蛋白質およびビタミンに関する栄養学的研究
1977 (52)	大磯 敏雄	国民栄養に関する研究並びに指導
1978 (53)	満田 久輝	食糧備蓄に関する基礎研究
1979 (54)	神立 誠	蛋白質栄養に関する基礎的研究とその推進
1980 (55)	稲垣 長典	ビタミンCに関する研究
" "	若生 宏	小児栄養に関する研究
1981 (56)	芦田 淳	蛋白質アミノ酸栄養学の研究
1982 (57)	福井 忠孝	国民栄養改善に関する研究と指導
" "	藤原 元典	ビタミン B ₁ に関する栄養学的研究
1983 (58)	井上 五郎	人に於ける蛋白質・アミノ酸必要量に関する研究
" "	村田 希久	タンパク質並びにビタミンに関する栄養学的研究
1984 (59)	阿部 達夫	臨床栄養学の研究ならびに指導
" "	二國 二郎	デンプン化学の基礎と応用への貢献
1985 (60)	須田 正巳	動的栄養学の研究推進と教育への貢献
" "	藤巻 正生	タンパク質の食品学的・栄養学的研究
1986 (61)	小原哲二郎	食糧資源の開発並びにその利用に関する研究
" "	速水 洸	カルシウムの栄養学的研究
1987 (62)	川村信一郎	豆類糖質に関する食品・栄養学的研究
" "	田村盈之輔	アミノ酸とタンパク質栄養に関する研究
1988 (63)	今井 陽	脂質の栄養生化学的研究
" "	谷 達雄	米の食糧学的研究
1989 (平 元)	金森 正雄	タンパク質の栄養・食品学的研究
" "	福嶋 博保	脂質並びに澱粉の栄養・食品学的研究
1990 (2)	小池 五郎	栄養生理学の研究と教育活動への貢献
1991 (3)	金田 尚志	過酸化脂質に関する栄養生化学的研究
" "	楠 智一	小児栄養に関する研究
1992 (4)	細谷 憲政	栄養学研究的の促進と栄養教育の体系化
" "	宮崎 基嘉	日本食品の栄養研究並びに食物教育の推進

【学 会 賞】

年 度	氏 名	授 賞 理 由
1961 (昭 36)	吉村 壽人	成人の蛋白質所要量の研究
" "	満田 久輝	クロレラの食糧化の研究
1962 (37)	中川 一郎	学童の必須アミノ酸必要量の研究
" "	久保 彰治	日本食品・特に米の無機成分の研究
1963 (38)	速水 決	カルシウム代謝の研究
" "	芦田 淳	低蛋白栄養の研究
1964 (39)	井上 五郎	人体に於ける蛋白質アミノ酸栄養の研究
1965 (40)	鈴木慎次郎	日本人のエネルギー代謝の研究
" "	宮崎 基嘉	ラッテによる必須アミノ酸の栄養の研究
1966 (41)	田村益之輔	血液遊離アミノ酸とアミノ酸栄養の研究
" "	谷 達雄	米の品質の研究
1967 (42)	福井 忠孝	学童の発育に及ぼすリジン補給の影響の研究
" "	金森 正雄	蛋白性食品の凍結乾燥の研究
1968 (43)	古武 彌人	トリプトファン代謝異常による実験的糖尿病
" "	山西 貞	茶の香気の研究
1969 (44)	村田 希久	アミノ酸栄養とニコチン酸代謝の研究
" "	千畑 一郎	酵素による L-アミノ酸の工業的製法の研究
1970 (45)	黒田嘉一郎	ガラクトースの栄養生理化学的研究
" "	藤巻 正生	食肉熟成の研究
1971 (46)	水原 舜爾	新含硫アミノ酸の研究
" "	川村信一郎	大豆炭水化物（とくに少糖類）の食糧学的研究
1972 (47)	桂 英輔	病人の所要熱量
" "	松尾 登	油脂の酸化および加熱による変性に関する研究
1973 (48)	白井伊三郎	人体のエネルギー代謝に関する研究
" "	吉川 誠次	官能検査および食生活未来予測の研究
1974 (49)	阿部 達夫	蛋白質・アミノ酸の臨床栄養学的研究
" "	松本 博	パン生地ドウに関する研究
1975 (50)	小出来一博	術前術後の栄養に関する研究—特にアミノ酸輸液の研究
" "	吉田 昭	蛋白質へのアミノ酸補足に関する基礎的研究
1976 (51)	金田 尚志	脂質の食品化学的研究
" "	田中 武彦	アミノ酸タンパク質の栄養生化学的研究
1977 (52)	大村 浩久	レダクトン類に関する研究
" "	新山 喜昭	妊娠時のタンパク質栄養に関する研究
1978 (53)	五島 孜郎	カルシウムの腸管吸収とその影響因子に関する研究
" "	伊吹 文男	植物性食品のプロテアーゼインヒビターに関する研究
1979 (54)	平田 清文	腎疾患の食事療法に関する研究
" "	中村 正	日本人のエネルギー代謝に関する研究
1980 (55)	木村 修一	食品成分の毒性発現と栄養条件の研究
" "	小町 喜男	食生活改善による脳卒中予防に関する研究
1981 (56)	桐山 修八	食物繊維の栄養学的研究
" "	弓狩 康三	病態別アミノ酸輸液に関する研究
1982 (57)	萩平 博	小腸機能の栄養生化学的研究
" "	松下 雪郎	脂質酸化の食品化学的研究

年 度	氏 名	授 賞 理 由
1983 (58)	印南 敏	環境汚染物質と栄養条件との相互関係に関する研究
" "	村松敬一郎	アミノ酸不均衡とその制御に関する栄養学的研究
1984 (59)	佐々岡 啓	食飼料中の特殊なアミノ酸類に関する食品生化学的研究
" "	細谷 憲政	消化・吸収の基礎的ならびに応用的研究
1985 (60)	楠 智一	小児の肥満に関する研究
" "	内藤 博	タンパク質の消化とミネラルの有効利用に関する研究
1986 (61)	小石 秀夫	ヒトの低タンパク食適応に関する研究
" "	菅野 道廣	コレステロール代謝の調節に関する栄養生化学的研究
1987 (62)	糸川 嘉則	ビタミン B ₁ に関する栄養学的, 生理学的研究
" "	加藤 博通	アミノカルボニル反応の食品化学的研究
1988 (63)	高橋 徹三	運動とタンパク質栄養に関する基礎的研究
" "	山口 賢次	含硫アミノ酸特にシステイン代謝と栄養に関する研究
1989 (平 元)	荒川 信彦	ビタミンC関連物質の栄養学的基礎研究
" "	鈴木 継美	食と栄養の生態学に関する研究
1990 (2)	五十嵐 脩	ビタミンEについての栄養食品学的基礎研究
" "	岸野 泰雄	栄養条件と細胞性免疫に関する研究
1991 (3)	綾野 雄幸	穀類食物繊維の食品栄養学的研究
" "	安本 教傳	セレンウムの食品栄養学的研究
1992 (4)	嶋津 孝	エネルギー代謝の神経性調節に関する研究
" "	武藤 泰敏	レチノイドの発癌予防に関する研究

【奨 励 賞】(授賞年度と受賞者氏名)

年 度	氏 名	年 度	氏 名
1973 (昭 48)	中村 治雄, 安本 教傳	1983 (昭 58)	今泉 勝己, 梶本 雅俊
1974 (49)	白木 啓三, 三好 正満	1984 (59)	篠原 和毅, 山本 茂
1975 (50)	競島 豊, 岡田美津子	1985 (60)	大谷 八峯, 鳥居 邦夫
1976 (51)	奥 恒行, 山本愛二郎	1986 (61)	阿部 啓子, 野口 民夫
1977 (52)	—	1987 (62)	斎藤 衛郎, 矢ヶ崎一三
1978 (53)	齋藤 昌之, 鈴木 正成	1988 (63)	井出 隆, 杉山 公男
1979 (54)	奥田 豊子, 堀井 正治	1989 (平 元)	金沢 和樹, 鈴木 和春
1980 (55)	藤田 美明, 田代 操	1990 (2)	門脇 基二, 山田 和彦
1981 (56)	岸 恭一, 辻 啓介	1991 (3)	河田 照雄, 鈴木恵美子
1982 (57)	五明 紀春, 西沢 直行	1992 (4)	堀尾 文彦, 吉田 宗弘

【学術奨励金】(授賞年度と受賞者氏名)

年 度	氏 名
1991 (平 3)	足立 己幸, 内野 澄子
1992 (4)	木村美恵子, 渡辺 道子

表 4. 会員数, 会費, 会計規模の推移 (1947~1992)

年 度	会員数*1 [口数]		会員会費*1 (円)		年度会計規模 (円) (収入総額)
1947 (昭22)	正	152	正	20	25,040
1948 (23)		(92)*2	正	50	15,562
1949 (24)		(480)	正	400	350,626
1950 (25)	正	737 (532)	正	400	424,976
1951 (26)	正	890	正	400	383,328
1952 (27)	正	790 (656)	正	400	441,506
1953 (28)	正	839	正	500	650,976
1954 (29)	正	1,067	正	500	637,177
1955 (30)	正	1,048	正	700	860,050
1956 (31)	正	997	正	700	924,714
1957 (32)	正	987	正	800	1,023,949
1958 (33)	正	1,000	正	800	1,113,685
1959 (34)	正	1,003	正	800	1,525,699
1960 (35)	正	1,218	正	800	1,584,249
1961 (36)	正	1,243	正	1,000	1,605,473
1962 (37)	正	1,245	正	1,000	2,001,989
1963 (38)	正	1,371	正	1,000	2,480,000
1964 (39)	正	1,476	正	1,200	3,059,881
1965 (40)	正	1,527	正	1,200	2,902,959
1966 (41)	正	1,702	正	1,200	3,269,036
1967 (42)	正	2,001 賛 44	正	1,200 賛 10,000以上	3,914,517
1968 (43)	正	2,291 賛 48	正	1,200 賛 10,000以上	3,776,669
1969 (44)	正	2,465 賛 47	正	1,800 賛 10,000以上	5,516,405
1970 (45)	正	2,502 賛 48	正	1,800 賛 10,000以上	6,905,149
1971 (46)	正	2,652 賛 50	正	2,800 賛 20,000以上	9,441,294
1972 (47)	正	2,691 賛 53	正	2,800 賛 20,000以上	11,536,154
1973 (48)	{ 正 2,236 賛 55 [62] 学 44 団 267		{ 正 2,800 賛 20,000以上 学 2,000 団 4,500		11,194,321
1974 (49)	{ 正 2,340 賛 59 [65] 学 64 団 289		{ 正 2,800 賛 30,000以上 学 2,000 団 4,500		12,309,859
1975 (50)	{ 正 2,297 賛 57 [67] 学 72 団 283		{ 正 3,600 賛 30,000*3 学 3,000 団 10,000		16,317,285
1976 (51)	{ 正 2,374 賛 60 [70] 学 93 団 300		{ 正 3,600 賛 30,000*3 学 3,000 団 10,000		20,320,318
1977 (52)	{ 正 2,452 賛 56 [63] 学 132 団 297		{ 正 3,600 賛 30,000*3 学 3,000 団 10,000		25,069,753
1978 (53)	{ 正 2,473 賛 69 [79] 学 136 団 294		{ 正 3,600 賛 30,000*3 学 3,000 団 10,000		24,558,380
1979 (54)	{ 正 2,565 賛 69 [82] 学 143 団 299		{ 正 3,600 賛 30,000*3 学 3,000 団 10,000		23,677,413
1980 (55)	{ 正 2,734 賛 65 [78] 学 200 団 305		{ 正 4,800 賛 40,000*3 学 3,600 団 13,000		30,430,190
1981 (56)	{ 正 2,778 賛 65 [78] 学 199 団 292		{ 正 4,800 賛 40,000*3 学 3,600 団 13,000		35,367,882

年 度	会員数*1 [口数]		会員会費*1 (円)		年度会計規模 (円) (収入総額)
1982 (57)	{正 2,871 学 231	賛 66 [78] 団 291	{正 4,800 学 3,600	賛 40,000*3 団 13,000	33,166,243
1983 (58)	{正 2,945 学 192	賛 67 [79] 団 292	{正 4,800 学 3,600	賛 40,000*3 団 13,000	36,505,858
1984 (59)	{正 3,046 学 217	賛 66 [78] 団 286	{正 4,800 学 3,600	賛 40,000*3 団 13,000	31,566,665
1985 (60)	{正 3,096 学 219	賛 66 [78] 団 273	{正 4,800 学 3,600	賛 40,000*3 団 13,000	30,450,934
1986 (61)	{正 3,187 学 228	賛 66 [78] 団 293	{正 6,300 学 4,200	賛 50,000*3 団 18,000	37,339,205
1987 (62)	{正 3,157 学 249	賛 65 [77] 団 292	{正 6,300 学 4,200	賛 50,000*3 団 18,000	37,159,058
1988 (63)	{正 3,157 学 249	賛 65 [77] 団 292	{正 6,300 学 4,200	賛 50,000*3 団 18,000	38,183,070
1989 (平元)	{正 3,198 学 266	賛 66 [78] 団 294	{正 6,300 学 4,200	賛 50,000*3 団 18,000	37,580,369
1990 (2)	{正 3,151 学 284	賛 66 [78] 団 290	{正 6,300 学 4,200	賛 50,000*3 団 18,000	38,841,927
1991 (3)	{正 3,344 学 270	賛 68 [80] 団 299	{正 6,300 学 4,200	賛 50,000*3 団 18,000	45,348,099
1992 (4)	{正 3,288 学 291	賛 68 [80] 団 292	{正 6,300 学 4,200	賛 50,000*3 団 18,000	—

*1 正：正会員，学：学生会員，賛：賛助会員，団：団体会員。*2 () は会費納入正会員数。*3 1 口の金額，賛助会員は 1 口以上を納めた者。

表 5. 名誉会員・終身会員氏名 (推薦年度順)

推薦年度	名 誉 会 員
1968	大森 憲太, 児玉 桂三, 杉本 好一
1969	井上 硬, 近藤 金助, 廣畑 龍造
1970	尾崎 準一
1971	原 実
1974	安田 守雄
1976	有本邦太郎, 島蘭 順雄
1978	有山 恒, 岩田 久敬, 香川 綾, 下田 吉人, 藤田 秋治
1980	藤本 薫喜, 高井 俊夫, 中川 一郎, 吉村 壽人
1981	黒田嘉一郎, 二國 二郎, 小柳 達男, 古武 彌人
1982	川崎近太郎, 小原哲二郎, 小幡彌太郎
1983	片桐 英郎, 大磯 敏雄, 神立 誠
1984	石崎 有信
1985	桂 英輔, 谷 達雄
1986	福井 忠孝, 村田 希久, 稲垣 長典, 若生 宏
1987	田村盈之輔, 芦田 淳
1988	川村信一郎, 満田 久輝
1989	藤原 元典
1990	須田 正巳, 阿部 達夫, 藤巻 正生
1991	井上 五郎
推薦年度	終 身 会 員
1980	山本 亮, 上代 皓三, 岩崎 康男, 木原芳次郎, 馬淵 秀夫, 別所 秀子
1981	東 秀雄, 小川 政禧, 松元 文子
1982	片桐 英郎, 田中 静雄, 花田信次郎, 宮川 正澄, 茂木 正利, 澤崎 千秋, 浅野 誠一, 伊藤 登
1983	三坂 亮雄, 舟橋 三郎, 上村 光男, 佐藤友太郎, 山本 晃治
1984	大谷 象平, 工藤 豊, 丹 貞一, 松尾 登, 速水 洪, 高木 和男, 道 喜美代, 武藤 静子, 倉沢 文夫, 津郷 友吉, 勝井五一郎
1985	田坂 重元, 川茂 賢成, 渡辺 厚, 足利 千枝, 津野 貞子, 古武 彌三, 上田 巖夫
1986	森本 宏, 今戸 正元, 丹羽 壮一
1987	支倉さつき, 林 路彰
1988	松村 義寛
1989	長嶺 晋吉, 野崎 幸久
1990	和田 せつ, 山西 貞, 川村 亮, 鈴木 隆雄
1991	長澤 太郎
1992	高橋 重磨

表 6. 編集委員長・副委員長氏名 (1972~1992)

年 度	委員長	副委員長
【学 会 誌】		
1972~73 (昭47~48)	村田 希久	細谷 憲政
1974~75 (49~50)	藤巻 正生	田中 武彦
1976~77 (51~52)	"	"
1978~79 (53~54)	"	松木 駿
1980~81 (55~56)	吉田 昭	阿部 達夫
1982~83 (57~58)	"	鈴木 継美
1984~85 (59~60)	鈴木 継美	加藤 博通
1986~87 (61~62)	加藤 博通	糸川 嘉則
1988~89 (昭63~平元)	糸川 嘉則	木村 修一
1990~91 (平2~3)	木村 修一	脊山 洋右
1992~ (4~)	脊山 洋右	菅野 道廣
【英文誌 (JNSV)】		
1973~79 (昭48~54)	吉村 壽人	——
1979~80 (54~55)	"	満田 久輝
		福井 三郎
1980~84 (55~59)	福井 三郎	田中 武彦
		金森 正雄
1984~86 (59~61)	芦田 淳	清水 祥一
		田中 武彦
		金森 正雄
1986~87 (61~62)	"	清水 祥一
		吉田 昭
		安本 教傳
1988~89 (昭63~平元)	清水 祥一	美濃 真
		吉田 昭
		安本 教傳
1990~91 (平2~3)	"	菅野 道廣
		美濃 真
		安本 教傳
1992~ (4~)	"	菅野 道廣
		美濃 真
		安本 教傳

表 7. 支部別会員数の分布 (1975 年 4 月 30 日, 1987 年 3 月 31 日, 1992 年 3 月 31 日調査)

支 部	年	名誉会員	終身会員	正会員 [百分率]	学生会員	団体会員	賛助会員 [口数]
北 海 道	1975	0	—	80 [3.4%]	1	15	0 [0]
	1987	0	2	101 [3.2%]	7	15	0 [0]
	1992	0	3	105 [3.2%]	10	14	1 [1]
東 北	1975	0	—	137 [5.9%]	2	19	0 [0]
	1987	1	0	167 [5.2%]	7	14	0 [0]
	1992	0	1	168 [5.0%]	17	14	0 [0]
関 東	1975	2	—	928 [39.7%]	20	116	42 [48]
	1987	13	17	1,278 [40.1%]	101	135	45 [56]
	1992	13	18	1,321 [40.2%]	127	127	50 [61]
中 部	1975	0	—	226 [9.7%]	3	39	4 [4]
	1987	1	5	295 [9.3%]	20	34	4 [4]
	1992	2	4	326 [9.9%]	31	31	4 [4]
近 畿	1975	1	—	509 [21.8%]	12	53	11 [11]
	1987	7	9	695 [21.8%]	48	54	15 [16]
	1992	7	7	729 [22.2%]	70	56	11 [11]
中国・四国	1975	0	—	263 [11.2%]	17	24	1 [1]
	1987	2	0	347 [10.9%]	32	24	2 [2]
	1992	0	0	349 [10.6%]	38	30	2 [3]
西 日 本	1975	0	—	169 [7.2%]	9	23	0 [0]
	1987	0	1	304 [9.5%]	13	17	0 [0]
	1992	1	1	292 [8.9%]	19	20	0 [0]
合 計	1975	0	—	2,340 [100%]	64	289	59 [65]
	1987	24	34	3,187 [100%]	228	293	66 [78]
	1992	23	34	3,288 [100%]	291	292	68 [80]

表 8. 理事・監事・顧問氏名 (1968~92)

理 事		(五十音順, () 内は在任期間)	
芦田 淳 (1970~71)	小池 五郎 (1968~71)	野口 忠 (1992)	
阿部 達夫 (1968~81)	小石 秀夫 (1972~77, 82~85)	萩平 博 (1984~87)	
五十嵐 脩 (1986~92)	古賀 克也 (1990~91)	橋詰 直孝 (1990~92)	
板倉 弘重 (1988~89)	古武 彌人 (1968~69)	林 伸一 (1988~89)	
糸川 嘉則 (1978~79)	小林 修平 (1990~92)	晴山 信一 (1988~89)	
井上 五郎 (1970~71, 76~79)	小柳 達男 (1968~73)	福井 忠孝 (1972~73)	
伊吹 文男 (1986~91)	五島 孜郎 (1976~79, 82~87)	福場 博保 (1968~73, 78~85)	
今井 陽 (1974~83)	斎藤 洋子 (1992)	藤巻 正生 (1974~81)	
岩井 和夫 (1968~69, 72~77)	坂本 元子 (1988~91)	藤本健四郎 (1990~91)	
印南 敏 (1984~87)	佐々岡 啓 (1988~89)	藤原 元典 (1970~73)	
上村 光男 (1972~73)	柴田 幸雄 (1978~79, 88~89)	細谷 憲政 (1972~77, 80~83)	
大磯 敏雄 (1970~71)	白井伊三郎 (1970~71)	舛重 正一 (1990~92)	
大村 浩久 (1972~85)	菅野 道廣 (1986~89, 92)	松木 駿 (1978~79)	
奥 恒行 (1992)	杉本 悦郎 (1980~81, 86~87, 92)	満田 久輝 (1968~69)	
小田切 敏 (1982~82)	鈴木慎次郎 (1974~75)	美濃 真 (1968~69, 86~89)	
加藤 博通 (1982~89)	鈴木 健 (1976~79, 88~92)	宮崎 基嘉 (1972~87)	
金森 正雄 (1970~81)	鈴木 継美 (1982~85, 88~91)	武藤 泰敏 (1990~91)	
加美山茂利 (1984~85)	脊山 洋右 (1990~92)	村田 希久 (1968~72)	
川崎 晃一 (1992)	高橋 徹三 (1974~77)	村松敬一郎 (1976~77, 82~83)	
川端 純一 (1984~85)	高橋 正侑 (1990~92)	守田 哲朗 (1980~81)	
川村信一郎 (1974~75)	田中 武彦 (1974~87)	安田 守雄 (1968~73)	
神立 誠 (1968~71)	谷 達雄 (1968~69)	安本 教傳 (1984~92)	
木村 修一 (1974~81, 86~91)	田村盈之輔 (1968~71)	山口 迪夫 (1984~87)	
桐山 修八 (1986~92)	柘植 治人 (1992)	山本愛二郎 (1992)	
楠 智一 (1978~81)	苫米地孝之助 (1986~89)	吉田 昭 (1972~75, 78~85)	
倉田 忠男 (1990~92)	内藤 博 (1980~87)	米澤 大造 (1980~83)	
黒田嘉一郎 (1968~69)	新山 喜昭 (1980~85)	和田 正太 (1968~71)	
監 事		(五十音順, () 内は就任初年度)	
荒尾 修 (1980)	高見 徹 (1990)	福場 博保 (1988)	安松 克治 (1986)
稲垣 長典 (1978)	谷 達雄 (1972)	藤原 元典 (1980)	弓狩 康三 (1982)
上村 光男 (1974)	千畑 一郎 (1978)	細谷 憲政 (1986)	吉川 春寿 (1968)
金森 正雄 (1982)	中村延生蔵 (1968)	満田 久輝 (1970)	渡辺 厚 (1972)
鈴木 継美 (1992)	原 実 (1970)	宮崎 基嘉 (1990)	
顧 問		(五十音順, () 内は就任初年度)	
芦田 淳 (1981)	島蘭 順雄 (1968)	福場 博保 (1988)	細谷 憲政 (1990)
井上 五郎 (1982)	内藤 博 (1992)	藤巻 正生 (1984)	満田 久輝 (1975)
櫻井 芳人 (1971)	福井 忠孝 (1978)	藤原 元典 (1985)	吉村 壽人 (1974)